
IS (インフィニット・ストラトス) / 青を守るゼロ

Sierra-312

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS / 青を守るゼロ

【Nコード】

N9985Z

【作者名】

S i e r r a - 3 1 2

【あらすじ】

死の運命を背負って生まれた獣がいた。

諦めの中にいた獣を一人の少女が励まし、生きようとする切欠を与える。

獣は吼えた。

「生きたい」と……。

その獣の願いを叶える様に獣の前に白き機械仕掛けの獣が現れ……。

01・目覚めるゼロ（前書き）

主人公はライガーです。

このライガーは人語を理解し、かなり賢いですが、人語を喋りだす事はありません。

また、人間になったりする事も在りません。

セシリアのペットです。

01・目覚めるゼロ

私は百獣の王と呼ばれるライオンを父に持ち、最も大きな体を持つアムールトラを母として生まれた。

だが、私の身体には不具合が在り、生まれた時より死と隣り合わせの生活を余儀なくされる。

私を助けようと多くの人間が私の元を訪れ、そして去っていった。どうやっても私は助からない。

それが私の運命なのだ、当時の私は幼いながらも悟っていたものだ。

そして、誰も私に見向きもしなくなった頃、私は一人の少女に出会った。

今でもアレは、運命的な出会いだったと感じている。

少女の名は、セシリア・オルコット。

おそらく彼女が私の元を訪れたのは偶然だろう。

生まれて数ヶ月でありながら、私は他のライガー達よりも遙かに大きな体を持っていた。

だからこそ、私が死ぬ前に一目見ようと訪れる人間は少なからずいたものだ。

彼女も最初はその一人だったのだろう。

だが、不思議な事に彼女は私の頭を撫でたのだ。

他の興味本位で訪れた人間たちは決して私の頭を撫でる事は無かった。

死に行く身体の私に触るのを恐れたのか、それとも硝子細工でも扱うかのように慎重になっていたのだろう。

だからこそ久しく飼育員以外に触れてもらう事ができて、嬉しかった。

なんだかんだと言っても、私は人工交配によって生まれた存在な

のだ。

故に、人が私から離れて行く事がどれ程寂しかった事か……。

だからだろう、弱々しくなってしまうた身体の全てを振り絞って彼女に向かつて頭を下げた。

それは、私の命を削つての敬意の表れだった。

私から彼女に送る事ができる最大の感謝の表れでもある。

彼女は驚いていたよ。

そして、私にこう言った。

「……わたくしが助けてあげますわ。オルコット家当主の名に賭けて」

彼女の言葉は嬉しかった。

だが、同時に「いまさらもう遅い」と思ってしまったのも確かな事だ。

幾ら金があるうとも、私が助からない事はすでに分かっていた。

様々な富豪が私を生かす為に金を払い、私がいる国も多くの金を獣医に支払った。

しかし、それら全ては無為に終わったのだから……。

彼女、オルコット家も私を生かす為にかなりの額をつぎ込んだ。

最初の方は彼女自身も私を励ましに来てくれたものだが、時が経つにつれて彼女は私を訪れなくなってしまうた。

私は彼女が他の人間同様、私に興味を失ってしまったのではないかと思つたものだ。

だが、当時の飼育員が言つた言葉。

「セシリアちゃんが来なくなつて寂しいかい？　彼女はね。イギリスって国で大事なお仕事をしているんだよ。お前には分からないだろうけど、ISっていう特殊な乗り物の国家代表候補生としてね。がんばってるんだ。だから、お前も頑張るんだよ」

衝撃的だった。

ISというモノを私は知っている。

私の元を訪れた人間が口にしたのを何度も聞いていたからだ。

人間の世界が女尊男卑という時代に入ってしまった事も知っている。

篠ノ之・束という人物が、ISという鋼鉄製の鎧を作ったと言う事も何度も聞いた。

だからこそ、私は当時の飼育員の言葉を正しく理解する事が出来た。

彼女が、篠ノ之・束という人物により混沌の坩堝に放り込まれた世界で必死に生きているのだという事を知ったのだ。

その情報は、私の緩やかに死に逝く身体に活力を注ぎ込むには十分だった。

私は……その時、生まれて始めて「生きたい」と願った。そして、その願いを込めて月夜に咆哮した。

こういう生まれだった故、私は神など信じていなかった。

だが、私は神を見たのだ

白き獣……。

その身を白き鋼鉄で包み込み、金に輝く鋼の爪と牙を持ち、紅く爛々と瞳を輝かせていた。

あの姿を忘れはしない。

いや、忘れたくとも忘れる事は出来ないだろう。

私の身体はあの白き神を見た後、父と母からもらった体毛は純白に染まり、金の瞳は紅く変わった。

そして、この身は病弱から程遠くなり、短命という運命からも解放される。

この変化は奇跡と称されたが、この私に対して異質な興味を持つ存在が現れた。

それは篠ノ之・束という名前だけは知っていた人物。

私は一目見ただけで分かった。

目の前に現れた女性は狂気で染まり、世界に飽きている人物だと……だから私はその女性が事前情報から篠ノ之・束だと判断する事が出来た。

だからこそ、その狂気が言った言葉は今でも信じることは出来ない。

だが、感謝はしている。

「ねえ、あの子と一緒に暮らしたくない？ 変色して色々と変わったライガーなんて珍しいからねー。色々と研究されちゃうよ？ 君、頭良いでしょ？ 色々理解してるよね？ なら、私が手を貸してあげる。一緒に暮らせるようにねー。暇つぶしとしては丁度良いしねー」

篠ノ之・束は口から吐いた言葉を守った。

私が変わってから一日。たった一日で私はオルコット家のペットとして特別に登録される事になる。

篠ノ之・束がイギリス政府に働きかけたのだろう。

一体何を言ったのやら、獣に過ぎない私には理解できない。

まあ、何にせよ。

私はこのオルコット家セシリアで主と暮らせるという幸せを享受する事が出来ている。

本来ならば死んでいるはずなのだから、これ以上の贅沢など望むべきではないだろう。

「すやすや……すやすや……」

伏せている私の体に寄りかかり、健やかな寝顔を浮かべる主の顔を見られる事を白き神と篠ノ之・束に感謝しよう。

主の重さすら私にとっては幸福の一部だ。

だが、主は国家代表候補であるが故、こうしていられる時間は残り少ないだろう。

高校生に上がった時、きっとIS学園に入学する為に日本へと旅立ってしまうのだろう。

私に出来る事は、ただ主の帰りを待つて静かにこのオルコット家を守るだけ……。

そんな事を考えていた時期も在った。

なぜだ……。

なぜか目覚めると檻に入れられ、飛行機らしき物に乗せられているのだ！？

というか、コレは何処に向かっているう！？

01・目覚めるゼロ（後書き）

ライガーとは？

ライオンを父に持ち、タイガー（トラ）を母に持つ異種間の雑種・交配種の事。

ライガーは足を伸ばした際の身長は最大で約3.56m、体重は450～600kg程にもなるネコ科最大の動物です。

正式な学名がない為、ライガー（ライオンからライ、タイガーからガー）と呼ばれています。

オスのライガーが生殖機能を持ちませんが、メスのライガーは稀に生殖機能を持ち合わせている場合が在り、子を成す事があります。

しかし、残念ながら生まれた子はどちらであつても生殖機能を持ち合わせることがないため、基本的に一代だけの種です。

ライガーは神経欠陥、遺伝子の異常、病弱などにより、ほぼすべてが短命という運命を背負っています。

02・困惑する獣

果たして何時間ほど空のうえを旅しているのだろうか？

この飛行機が何処に向かっているのか、どういった飛行機なのか、私は知らない。

……。

ふう、世の中には密売というものがある。

密売人からしてみれば、私という健康体の白いライガーは金のなる木というヤツなのだろう。

だが、それならば見張りとなる人間が付いているはずだ。

主と見たスパイ物の映画では、密売人は密売する物を必ず見張っているというセオリーがあった。

無論、現実と空想との違いは分かる。

ここが密売人の所持する飛行機の中ではない事など分かっている。しかし、私をさらってなんとするのだろうか？

「びんぽん、ばんぽん」

微妙に間延びした声が機内に響いた。

この飛行機の持ち主だろう。

というか、私はこの声の主を知っている。

「やあ、久しぶり。この天才東さん航空が向かっている先はIS学園上空です。君はゴーレム試作機と一緒に落下して貰うよ？ あの未確認が君に与えた力、見せて欲しいな」

以前会った時同様、冷たく見下すような声色。

私を物と認識しているのだろう。

否、実験動物と考えているのだろうか、この存在ならば致し方な

い。

しかし、力とは何だ？

「あの未確認、仮にZEROと呼称するけどさー。そのZEROは天才東さんですら見つけるのが遅れたんだよね。アレって何なのか？ ISじゃないし、機械でもないし、生命体でもないしねー。一瞬だけ確認できた反応はすぐ消えちゃってさ。次に反応が現れたときに見に行ったら君がいたわけなんだ。だから、あの未確認は間違いなく君と一つになっている。この天才東さんですら分からない存在……。暇つぶしとしてはちょうど良いよね？」

何を言っている？

この狂った存在を理解できる者はいるのだろうか？

私の一生では、どんなに頑張っても理解する事は出来ないに違いない。

むしろ、理解などしたくない分類に入る人間なのかもしれないな。

「君が世界に順応しやすいように調整はしといてあげる。その力はISって事にしとくからね？ それじゃ、頑張って東さんの暇つぶしになってねー」

篠ノ之・東が何を言っているのか良くわからないが、力とやらが私には在るらしい。

しかし、私はその力とやらを理解してはいない。

一体何のことを言っているのやら？

『1時間ほどでIS学園に到着いたします。乗客の方は落下にお備えください』

物騒な機械音声が続く。

篠ノ之・束の声が聞えなくなった事と生命の気配が先ほどから一切感じられない事から、どこか遠くから私の状況を見ながら話していたのだろう。

しかし、落下するとはどういう事なのだろうか？

まあ、なんにしても1時間ほど猶予が在るらしい。

それならば何かしら対策を練る事も出来るだろう。

とりあえずは、この檻から……。

ん？ なんだ、鍵は掛かっていなかったのか？ とりあえず、周りをしてみるか……。

いままで乗った事のある飛行機に比べて若干丸みを帯びている様な気がしないでもない。

丸い窓らしきものがあるが、そこから翼を見ることは出来ない。

機内には私が入っていた檻と鋼鉄製の棺桶の様な物が置いてあるだけで他には何も無い。

隣の部屋、恐らくは機長室などが在ると思われる場所へ続く扉も確認できない事から、密室状態であることが分かるのだが……。

エンジン音もしなければ、飛んでいる音もしない。

振動も私が殆ど感じないのだから、人間ならば全く感じる事は出来ないほどのものだ。

最悪、私が乗っているのは飛行機ではない可能性がある。

よくよく考えてみれば、篠ノ之・束が関わっている時点でこの乗り物も何か未知の物体である確立が高い。

99.9%くらいでエンジンの形である事も予測できる。

ま、これ以上の事を私が考えても意味はないだろう。

むしろ、私が一人だと会話もないし、私が喋ったところで……。

「！」

とまあ、母譲りの鳴き声となる。

ちなみに吠えると……。

「?????????!」

父譲りの吠え声となるわけだ。

喋れたりすれば便利なワケだが、種族が違う故にそれは不可能というモノだろう。

まあ、主は私が喋らずとも私の成したい事を理解してくれる故、人語を喋る必要性はないだろうな。うむ。

さて、残り50分ほどか？ これ以上探索する所もないし、他にやることもない。

よし、寝よう。

。

。

。

40分後。

『 エンジン航空をご利用頂き有難う御座います。本便は残り10分ほどで空中分解致します。衝撃に備えてお待ちください』

空中分解するのか？ 私は飛べないんだが？ というか、高度はいまどれくらいなんだ？ それと、天才東さん航空じゃなかったのか？ いや、いまはそんな事はどうでもいい。

窓から見える景色は青い空と白い雲ばかり……。

下を見ることは出来ない。

少なくとも雲の上を飛行しているという事になるわけだ。

一言に雲の上と言っても高度は様々ある。

飛行機はたいがい高度1万m程の所を飛ぶらしい。

この飛行機モドキの高性能エンジンならば、2万mくらい軽く超

えていそうだ。

確か、空の上は寒いと聞いた事がある。

主の侍女であり、私のご飯係りでもあるチエルシー・ブランケット、チエルシー殿が言っていた。

「どうしたの？ 空ばかり眺めて」

「……」

「セシリア様と一緒に見ていたテレビで雪が映っていたわね。だから空を眺めているのかしら？」

「……」

「雪はね。空から落ちてきた水が固まって結晶になったものなの？ わかる？ でもね。地上暖かいと途中で溶けて雨になってしまうの。だからね。雲の上がすごく寒くないと雪にはならないのよ？ でも、雲の上は元々かなり寒いから高いところでは雪が見れるかも知れないわね」

確かこんな様な内容だったと記憶している。

チエルシー殿は私に話しかける時、まるで幼子に話聞かせるように喋る癖がある故、言われた事が全部正しいとは限らない。

だが、雪が空から降って来る事は確かだ。

こんな所で空中分解されたら凍ってしまうかもしれない。

『また、本便に搭載されているゴーレム試作型はセシリア・オルコットを攻撃対象としています。ISをまとっていない状態であっても攻撃を行う為、ご注意ください』

なに？ 主を狙うと言うのか……。

自らを天才と称し、一部の人間以外には興味すら示さない。

私の事も玩具と認識している篠ノ之・東ならばやりかねないだろう。

しかし、ここで外に放り出されれば、たとえ寒さに耐える事が出来たとしても空を飛ぶ事が出来ない私は地面に叩き付けられて死ぬだろうな。

空を飛べない生命体がこの高度から落とされて生き残る方法は…

…。
あるのか？ いや、ないだろうな。

ならばせめてゴーレム試作型とかいう物を壊れば良いが、あの鋼鉄の棺桶を破壊する事は私では不可能だ。

そして、あの中身であるゴーレム試作型というものはISなのだろう。

篠ノ之・東が関わっているのならば、IS以外は思いつかない。

『カウントダウンを開始します。残り300秒』

はあ、せっかちな事だ。

もう少しユックリと対策を考えさせてもらいたいものだが、こちらの都合には合わせてもらえないのだろう。

私が死ねば、主とチエルシー殿は悲しむだろう。

私が死ねば、目の前にあるゴーレム試作型が何の妨害も受けずにIS学園で学生生活を送っている主を攻撃する為に動き出す事だろう。

空中分解で死なず、外の寒さも耐え切ったとしよう。

だが、着地はどうする？

確かに私は父よりも母よりも優れた個体なのだろうが、この高さから落ちて無事なワケがない。

あの白い神でも無い限り……。

『残り174秒』

ふむ、そういえば私が生まれた施設の飼育員が言っていたな「困

った時の神頼み」と……。

人工交配により生み出された私に……。自然の子ではない私を想ってくれる神がいるかどうかは知らないが、いるのならば！

『残り105秒』

白き神と同じ身体が欲しい。

私の前に立ち塞がる壁を完膚なきまでに木っ端微塵にする事が出来る力！ 主を守る身体、如何なる敵をも引き裂ける爪、あらゆる物を噛み砕ける牙、母にも近い俊敏性、父にも優るとも劣らぬ覇気が欲しい。

私は野生ではない。人工的な獣だ。

だが、欲しい。

主を守るといふ本能が欲しい。

『残り34秒』

。。。。

青と白が戦っていた。

白は青よりも強く、青の命令により飛び交う妖精を一閃し両断する。

両断された妖精は、慣性に従うように白の横を通り過ぎ、爆散した。

青に勝ち目はないだろう。

青は白を侮っていた。最初から自らよりも弱いと思い込んでいた。ソレが敗北の理由。

白は自らの牙を研ぎ澄まし、青へと最速で突撃する。

だが、白は未熟だった。

与えられた力に酔いしれていた。

だから気がつかなかった。

その牙に相手を噛み砕ける程の力が残されていない事に、気がつかなかった。

白の牙は青まで届かず、決着を告げる音が鳴り響く。

そして、機械によりアリーナまで届けられた声が告げる。

『試合終了。 勝者 セシリア・オルコ』

だが、その声は最後までアリーナに響く事はなかった。

なぜならば、それを遥かに上回る音と衝撃がアリーナに響き渡ったからだ。

アリーナの地面に大きなクレーターを作り出し、瞬時にアリーナ全てを支配下に置いたソレは、一言で言うのなら鋼鉄の棺桶。

ピットへの入り口を封鎖し、出入り口も封鎖する。

そして、観客席と会場とを分けるシールドを最大に設定し、外部の侵入を許さなくした。

自らがぶち破って出来た上部の裂け目以外は……。

「な、なんだ？ 何が起こって……」

「一夏さん！ 試合は中止ですわ！ 逃げますわよ」

混乱する白、その手を掴み逃げようとする青。

だが、乱入者の支配下に置かれたアリーナはソレを許さなかった。ピットへの入り口は固く閉ざされ、外へと出ることは出来ない。

「そ、そんな……。開きませんわ」

「それくらいなら俺の零落白夜で」

「無理ですわ。先ほどの戦いで一夏さんの白式はそのエネルギーを使いきってしまったています。展開しているだけで精一杯のはずですわ」

「なら、セシリアの」

「……。わたくしももてる限りの力で戦いましたもの。エネルギーなんて残ってるわけありませんわ」

閉じ込められた白と青。

その後ろでは、鋼鉄の棺桶が開き、中身が姿を現した。

上半身は全身装甲型ISと言えなくもない。

首が無く、頭が肩に埋まっている様な見た目をし、異常に長い腕を持っている。

下半身は未完成なのだろう。

鋼鉄の棺桶から伸びる無数のチューブに繋がれ、エネルギー供給を受けている事が見て取れた。

作り掛けのIS。

それを無理やり動かしているようなイメージを受けるが、それは確かな敵意を青に向けていた。

最初のソレの敵意に気がついたのは白だった。

そして……。

「あぶねえっ!!!」

白は青を抱きかかえ、咄嗟に横へと転がる。

直後、先ほどまで青がいた空間を熱線が直撃した。

その出力は、現状の白と青の絶対防御を貫くには十分な威力。

白と青の背中に冷たい汗が流れ、表情が青ざめて行く。

特に青の変化は著しかった。

青も気がついたのだろう。

目の前のソレが青を狙い、死んでしまっても構わないと思っ
てい
る事に……。

観客席からその状況を見ている教師も気が気ではなかった。

突如現れた未確認、そして一瞬で支配権を乗っ取られた第三アリ
ーナ。

放送などがない事から本当にすべての機能が乗っ取られた事を最
強の名を関する教師の一人は察していた。

どうする事も出来ないこの状況に胸が押しつぶされそうになりな
がら……。

「……い、一夏さん」

「なんだよ？」

「わたくしから離れてください。アレの目的はわたくしの様ですし」

「震えてんのに何言ってるんだ！ それにさ、女一人守れなかったら
男が廃るぜ」

白は青を抱きかかえ、残ったエネルギーで逃げ続ける。

当れば白は解除され、生身で敵の前に放り出される事になるだろ
う。

零落白夜はエネルギーが足らずに使用できない。

青は震え、完全に敵の殺意にも近い敵意に飲まれてしまっ
て動
けない。

だから、白は青を抱きかかえて逃げ続けた。

奇跡を起きる事だけを信じて……。

。
。
。

そして、その奇跡は、白が力尽きる寸前に舞い降りた。
鋼鉄の棺桶があけた穴からもう一つ、何かが敵に向かって落ちてきたのだ。

敵は落ちてきたものを弾き飛ばす。

弾き飛ばされ、土煙をあげながら第三アリーナの壁にぶち当たった何かは、ゆっくりと立ち上がる。

煙から映し出されるシルエット。それは、4 mほどの巨大な獣だった。

「?????????!!」

咆哮と共に土煙は晴れ、獣の姿が露になった。

カラーリングは白、鋼鉄製の体に鋭く並ぶ金色の牙を見せながら唸り声をあげる。

鋭く紅い瞳は敵を睨みつけ、金色の鋭い爪は敵を引き裂かんと力が込められていた。

見た目は鋼鉄製のライガー。

そして、誰の目にも明らかなのは二つ。

鋼鉄製のライガーが狙っている獲物が棺桶の様なISである事、
そして明らかにならぬライガーが怒り狂っている事の二つ。

02・困惑する獣（後書き）

主人公の名前を考えていませんでした。

また、セシリアが一夏に惚れた理由を強くする為にこの様な演出としました。

鈴の時にもゴーレム？は降って来ます。

これ以外は原作側に沿った形で書いて行きます。

00/1 タイプゼロ(前書き)

Fate風味にしてみました。

00/1・タイプゼロ

【CLASS】ライガー

【マスター】セシリア・オルコット

【真名】????

【性別】オス

【身長・体重】3.15m（立ち上がると6m越え）・530kg

【属性】秩序・中庸

【ステータス】筋力B++ 耐久A 敏捷B+ 魔力E 幸運E
宝具B

【クラス別スキル】

縄張り形成：A

自らの領域として範囲内の全てを把握できる。

20から400平方kmに及ぶ広大な範囲の把握が可能。

ただし、一度は見て回らなければならない。

気配遮断：EX

完全に気配を断てば、もはや人間には見つける事は不可能。ただし自らが攻撃態勢に移ると気配遮断のランクはBまで低下する。

【保有スキル】

雑種強勢：EX

両親に比べて優れた種となる現象。

これにより両親よりも遥かに巨大な身体となり、力も強くなっていくが、生殖能力を失い、病弱となる。

このことから、百獣の王とされるライオンと龍と争う寅を親とするライガーは、筋力・耐久・俊敏のランクを大幅に上昇する事が出来る。反面、幻獣種ではない事と生殖能力なし・病弱である事から魔力・

幸運のランクが大幅に低下する。

忠実：B

人に育てられた為、人間に対して忠実となる傾向がある。
オスなので女性の場合はランクがAへと上がる。

狂乱：E

野生を持たぬ人工交配種では在るが、両親から受け継いだ野生が稀に目覚める。

マスターの手から離れ、本能が赴くままにマスターの敵を蹂躪する。
一定以上マスターが傷つくと自動発動。

敵の死亡が確認されるまで解除されない。

【宝具】

TYPE タイプゼロ ZERO

ランク：E 種別：自己強化宝具 レンジ：0 最大捕捉：1

戦闘時に強制発動される宝具。

他のサーヴァントが持つ宝具の様に切り札と言えるものではない。
自らの体を機械生命体へと創り換えて戦う特殊な物である。

この状態になる事で如何なる攻撃にも一定の耐久力を有する事になる。

ステータスを筋力A、耐久A+、俊敏B++、魔力B、幸運EXに置き換える。

また、他に3つの姿を有する。

(幸運EXである理由。自らの能力を上回る敵と交戦^{フューライ}。だが、相手の実力を上回る程の戦いぶりを披露し、最後には勝利を収めた事から)

TYPE JAGER タイプイーター

ランク：E 種別：自己強化宝具 レンジ：0 最大捕捉：1

TYPE ZERO タイプゼロ から派生した状態。

高速戦闘形態であり、ボディカラーはネイビーへと変化する。

背中の可変式大型イオンブースターは上下左右と自在に稼動する為、単に直線スピードが上がるわけではない。

ステータスを筋力B、耐久B、俊敏EX++、魔力C、幸運Aに置き換える。

ただし、フィールドが森の場合は幸運Eとなる。

（森林に突入した際、イーターユニットを損傷する事故を起こした事から）

TYPE SCHNEIDER タイプシュナイダー

ランク：E 種別：自己強化宝具 レンジ：0 最大捕捉：1

TYPE ZERO タイプゼロ から派生した状態。

格闘戦闘形態であり、ボディカラーはオレンジに変化する。

7本のレーザーブレードと5基のエネルギーシールドジェネレーターにより絶大な攻撃力と防御力を有する。

全身に無数のスラスタを装備している為、TYPE JAGER に比べれば遅いかなりの速度を出す事が可能。

しかし、膨大なエネルギーを消費する為、この形態を維持できる時間は短い。

ステータスを筋力EX+、耐久EX+、俊敏A+、魔力A、幸運Aに置き換える。

また、大技であるセブンブレードアタックを使用すると強制的にTYPE ZEROへと移行される。

（赤いブレードライガーの戦いでセブンブレードアタックを使用した後、シュナイダーユニットを激しく損傷した事から）

タイプパンツァー
TYPE PANZER

ランク：E 種別：自己強化宝具 レンジ：0 最大捕捉：1

TYPE ZEROタイプゼロから派生した状態。

砲撃戦闘形態であり、ボディカラーはグリーンに変化する。

全身を重装甲で覆い、様々な重火器を装備した事により尋常ならざる攻撃力を有する。

全身にミサイルを満載し、背中には重砲ハイブリッドキャノンを装備している。

全てのTYPEの中で最も遅いが、拠点制圧などを目的とし、圧倒的な火力を持つて敵部隊を強襲する事が可能。

全砲門斉射による必殺バーニングビックバンは、耐久A以下ならば殲滅する威力を誇る。

ステータスを筋力EX++、耐久A、俊敏B、魔力A、幸運EX++に置き換える。

また、オーバーヒートしたが奇跡的に再起動し、衛星の残骸を粉碎するという奇跡を起こした事から、この形態で一度敗北しても蘇るその後、小惑星すら砕くバーニングビックバンを一度だけ使用することが可能。

だが、使用するとTYPE PANZERの自己回復が終わるまでTYPE PANZER状態になる事は出来ない。

オーバーヒート
(半壊した状態で在りながら奇跡的に再起動し、落下してくるジャッジ衛星の残骸をバーニングビックバンで粉碎する。しかし、活動限界を迎えユニットを強制排出した事から)

00/1・タイプゼロ(後書き)

誤字は見つけ次第直して行きます。

00/2・タイプゼロ(前書き)

風味ではないバージョン。

00/2・タイプゼロ

【TYPE ZERO】タイプゼロ

篠ノ之・束の手により、ISとして登録されている未確認金属生命体。

現在はオルコット家のペットとなっているライガーと融合している。ライガーの意志の応じ、その身を自らの物へと置き換えて戦う。

非常に高い金属細胞再生能力を有する為、TYPE ZEROとなったライガーを倒す事は量産ISでは不可能に近い。

元となつているライガーを機械化したような姿をしており、その大きさは元のライガーを一回り大きくしたような物で、体重は凡そ2.7倍ほど。

シールドバリアーは有していないが、殆どの攻撃を減少させる特殊な金属細胞で出来ている装甲を持ち合わせ、金属細胞再生能力と合わさる事でダメージを負っても瞬時に修復する事からシールドバリアーを纏っていると勘違いされている。

元々はライガー型オーガノイドであり、脳を損傷した事から病死する寸前のライガーの脳を自らの脳として生き永らえた。

ISではないのでISの装備を使用する事は不可能。

量子化も出来ないが、過去に登録されている装備を精確に記憶している事から金属細胞を瞬時に変化させ、該当する外装に換装する能力を有する。

変化後の装甲は、破損しても数時間から数日で自己修復を完了させる。

大破する程のダメージを受けた場合の修復には数週間を有する。

基礎であるTYPE ZEROの回復能力は異常であり、損傷しようが大破しようが数秒で治ってしまう。

しかし、中身（骨や臓器など）の修復は行われなない為、ダメージは

発生する。

PIC、ハイパーセンサー、コアネットワーク、シールドバリア、絶対防衛、ワンオフアビリティー、パッケージなどの諸々を持ち合わせない。

篠ノ之・束により『RZ-00 LIGER ZERO』というISとして登録され、ISを使える希少種としてオルコット家ペットの白いライガーも登録されている。

イギリス代表候補佐という肩書きまで用意された。

また、CASという特殊な機能が採用されていると篠ノ之・束により発表された。

この事により、装甲が変化しても量子変換する事で外装の全てを瞬時に換装している物とされている。

各国関係者は色々と負に落ちない点も残ったが、篠ノ之・束ならば仕方ないとして納得せざる負えなかった。

【ステータス】

【名前】 ????

【性別】 オス

【身長・体重】 3.15m（立ち上がると6m越え）・530kg

【性格】 温厚

【年齢】 2歳（凡そ27歳）

【詳細】

真っ白な毛並みに紅い瞳を有するが、アルビノではないライガー。ライガーとしては珍しく健康体であり、父と母であるライオンとアムールトラ程の耐性を有する為、病気にも強い。

短命という運命から解放された希少種であり、おそらく寿命は20年程ではないかと言われている。

【名称】 RZ-00 LIGER ZERO

【所有者】 オルコット家ペットのライガー

【全高・体重】 4.37m（立ち上がると8m越え）・1438kg

【最大速度】 314km/h

【武装】

ストライクレーザークロー×4

レーザーファンゲ

イオンターボブラスター×2

ダウンフォーススタビライザー×2

65口径式連装ショックカノン

80口径ハイデンシテイビームガン

【必殺（ワンオフアビリティ扱い）】
なし

【名称】 RZ-01 LIGER ZERO JAGER

【所有者】 オルコット家ペットのライガー

【全高・体重】 4.77m（ブラスター込/立ち上がると8m越え）
・1621kg

【最大速度】 3721km/h

【武装】

大型イオンブラスター×4

小型イオンブラスター×8

イオンターボブラスター×4

対物ブレードセンサー×8

マルチブレードアンテナ×2

バルカンポッド×2

エアロフェアリング×4

サイドスラスタ×2

ストライクレーザークロー×4

レーザーファンゲ

【必殺（ワンオフアビリティ扱い）】
ミラージユファンゲクラッシュ

【名称】 RZ - 02 LIGER ZERO SCHNEIDER

【所有者】 オルコット家ペットのライガー

【全高・体重】 4.68m（ブレード込／立ち上がると8m越え）
1957kg

【最大速度】 1198km/h

【武装】

ラッシングレーザーブレード×5

レーザーブレード×2

エネルギーシールドジェネレーター×5

マルチセンサー兼スカウターポッド

高出力イオンターボブースター×2

高機動スラスタ×4

肩部高機動スラスタ×2

ストライクレーザークロー×4

レーザーファンゲ

【必殺（ワンオフアビリティ扱い）】
バスターズラッシュ・セブンブレードアタック

【名称】 RZ - 02 LIGER ZERO PANZER

【所有者】 オルコット家ペットのライガー

【全高・体重】 4.98m（キャノン込／立ち上がると8m越え）
2213kg

【最大速度】 268km/h

【武装】

ハイブリッドキャノン（TZ216mmレールガン・TZ108
mmビームガン）×2

TZ背部6連装マイクロホーミングミサイルポッド×6
TZ腰部3連装マイクロホーミングミサイルポッド×4
TZ肩部2連装マイクロホーミングミサイルポッド×4
TZ脚部2連装ミサイルポッド×6
バルカンポッド×2
TZ胸部3連装グレネードランチャー×2
マルチブレードアンテナ×2
エアロフェアリング×4
【必殺（ワンオフアビリティ扱い）】
バーニングビッグバン

必殺に関しては装甲の種類により名前が違うだけで同じワンオフ・アビリティとして登録されている。

登録されているワンオフ・アビリティ名は【EVEN ANY

イブンエニーフューチャー

FUTURE/誰にでも平等な未来】であり、セシリアのブルー・

ティアーズの画面には上記の発動承認画面が表示される。

00/2・タイプゼロ（後書き）

武装の細かな説明は、その外装が活躍した回に後書きに書きます。

03・怒れる獣

私が強く願った時、頭の中に父を思わせる咆哮が聞えてきた。戦えと言われている様な気がする。

私は幼い頃に一度だけ父の姿を見た事がある。

怪我をして施設に入った野生のライオンだったと飼育員が言っていた。

だからだろう。

年老いた王の様な雰囲気醸し出す父からは、色あせる事のない覇気が漂っていた事を覚えている。

別種である母も、父の側に寄り添っていた。

アムールトラ最大の身体を誇る母は、父よりも遥かに大きな体を伏せ、父の側で私を見ていた。

そういえば、飼育員がこんな事を言っていた。「あそこまで中の良い別種夫婦は珍しい」と。

目を瞑れば、今でもあの時の光景を思い出す事が出来る。

たった一度だけしか会った事が無く、話したこともない両親だが、それでも私の心に残っている。

そして今、思い出す光景の中には両親の後ろで私を見つめる白き神がいた。

「
」

白き神の紅い瞳が細められ、私に向けられる。

まるで「力をくれてやろう」と言われているかの様だ。

確かに私は力を欲した。

力が欲しいと叫んだ。

だからだろうか？ 父と母が私の元へ白き神を連れて来てくれたとでも言うのだろうか？

なんにしても、いまは深く考えている暇はない。
あのISと思われる者を破壊しなければ成らない。
私よりも遥かに重いアレは、物凄い速度で落ちていつてしまった。
急がなければならぬ。
力が貰えるのならば、主を守れるだけの力が欲しい。
主を守るといふ本能が欲しい！

「?????????!」

思いを込めて吼えた時、身体の奥底から湧き上がってくる物を感じた。

それは無数の記憶。

私が経験した事のない戦いの記憶。

巨大な獣が大地を駆け巡り、滅びし恐竜が闊歩する。

機械仕掛けの生命が人と共に覇権を争い戦っていた星の記憶。

流れ込んでくる膨大な記憶の中、私の方を見つめる白く巨大な機

械仕掛けの獣がいた。

白き神を大きくした様な見た目だ。

その紅い瞳に映る私の姿は、白き神と同じ様な姿をしている。

私が私自身の姿を認識した時、下から様々な人間の悲鳴と爆音が

聞えてきた。

その中には主の声も含まれているのが分かる。

「わたくしから離れてください。アレの目的はわたくしの様ですし」

「震えてんのに何言ってるんだ！ それにさ、女一人守れなかったら男が廃るぜ」

主の声は恐怖で震えていた。

もう一つ主の近くから聞えた男の声は、恐怖を感じながらも主を守ろうとする気迫が感じられる。

だが、恐怖と共に不安の色も聞き取れる。

主を守るうとしてしている男では、目の前の脅威を被えないのだろう。

「！」

眼下を見れば、主を攻撃し続ける敵を見る事が出来た。

ならば、私のやる事はただ一つ。

この鋼鉄の爪を持って主の敵を切り裂く事のみ。

そう心に決めた時、私の事を見守ってくれている両親と白き神が微笑んだ様な気がした。

。。。

白と青の敵に向かって、何かが上空から落ちて来た。

落ちて来た何かは、敵に接触すると弾かれる様にアリーナ端へと吹き飛ばされて行く。

それは吹き飛ばされ、アリーナの壁に当たると鈍い金属同士がぶつかる音を響かせ、衝撃と共に土煙を舞い上げた。

土煙から見えたシルエットは、4 mほどの巨大な獣。

その獣は低い唸り声をあげた後、その場の土煙を消し飛ばし、空気を振動させる程の咆哮をあげた。

「??!!!!」

白い鋼鉄製の身体、金色の鋭い牙を剥き出しにし、牙と同じ色の爪は敵を引き裂かんと力が込められている。

そして、紅く鋭い瞳は敵を睨みつけ、今にも襲い掛かりそうだ。

だが、その白い獣が最初に取った行動は、白が抱える青を守るよ

うに移動する事だった。

そして、鋼鉄製の獣は敵の攻撃を一切避けることなく、一直線に突っ込んで行く。

肩の装甲が削れようと、頭部の装甲が熱せられ一部が融解しようとも無視して突き進む。

敵との距離が3m程になった時、飛び掛った獣の牙が敵の首部と一体化した肩部を噛み砕いた。

「！」

次に白と青、観客席にいる多くの生徒と二人の教師の目に映ったのは、鋼鉄の獣に蹂躪されている未確認ISの姿だった。

振り払おうとする腕は爪で引き裂かれ、残った腕も噛み砕かれる。だが、そこまでもしても機械仕掛けの獣の怒りは収まらず、咆哮をあげた後、敵の頭部を噛み砕いた。

銀の液体が血のように辺りに飛び散り、パイプはまるで血管の様に液体を吐き出しながらのたうち回る。

ショートしたコードは悲鳴の様な音を響かせた。

人々はただ呆然としながらその光景を見守るしかなかった。

人間の力ではどうする事もできない世界、野性の世界が広がって来たからだ。

しかし、青だけはその獣が怒ってる理由を知っているかの様な瞳をしながら弱肉強食の世界を見続ける。

そして、人知れず青は嬉しそうな表情を漏らした。

。

。

数時間後。

私は今、主に頭を撫でられながらお座りをしている。

本能が赴くままにゴーレム試作型なる無人ISを粉碎してしまったが、主を守る事が出来た事を誇りに思っている。

まあ、我ながら少しやり過ぎてしまったと思う心も確かにある。

しかし、後悔はしていない。

「まさか第三アリーナで白式を待っている間にそんな事になっていたとはな。はあ……」

目の前で溜息を吐いた人物は、織斑・千冬という人らしい。

主がいるクラスの担任の人だという。

織斑・千冬が溜息を付いている理由は一つだ。

テレビで私の事が大々的に紹介されており、篠ノ之・東が珍しく公の場にホログラム映像でありながら姿を表していたからだ。

『本当にねー。偶然見つけたんだけど、希少種の白いライガーにね。この天才東さんが作ったISコアの一つがビビツと反応したんだよ！ だからねー。即興で専用IS作ってIS学園に放り込んでおいたからちーちゃん、世話の方をお願いね！』

迷惑な話である。

私は人間に比べると遙かに短い時間しか生きられないというのに毎日、毎日騒がしいのでは溜まった物ではない。

まあ、主の側に居られるので不満はないが……。

ちなみに補足だが、私が居なくなった事に気がついたチエルシー殿の慌てようは色々と問題だらけだったらしい。

まるで我が子が居なくなってしまうた母親の様に取り乱していたらしく、チエルシー殿以外に雇われていた方々がなでめるのに苦労したと主にメールでお伝えしていたのを確認している。

そして、私がテレビで放送された直後に気を失ってしまったそう
だ。

……。
主は主だが、チエルシー殿は私の第二の母にも近しい女性である。
オルコット家に里帰りした際は、思う存分私の毛並みを味わって
もらおう。

「さて、オルコット……。いつまでソイツを撫でている？」

「あ……。も、申し訳在りません。つい実家の癖が出てしまいました
たわ」

職員室とか言う場所で私を平然と撫でているのは主のみであり、
他の教員と思われる方々は少なからず恐怖の感情が瞳から見て取れ
る。

もちろん、好奇心の感情を露にする教員の方もいるにはいるが、
私がそちらの方を向くと怖がった様な表情をするので何とも言えな
い。

「まあ、いいだろう。以後気をつける」

「はい！」

「あと、ソイツはイギリス代表候補補佐という肩書きを得ている。

世界で唯一ISを使える人間以外の動物として……。面倒事を起
こすなよ？ いいな？」

「はい！ この子は良い子なので大丈夫です」

「本当だな？」

「……。わたくしの言う事は絶対に聞きますし、頭の良い子で言葉
も理解しているみたいですので嫌がる事をしなければ大丈夫だとは
思います」

大人しくしている私を見ながら主に釘を刺す織斑・千冬。

人間が多く暮らし、ISという特殊な物を操れる生徒を各国から集めて教育している機関に、私という肉食動物が現れたのだから致し方ないだろう。

最初の無人ISを無残な姿にしてしまったのも良くなかったのかも知れない。

少し反省しよう。

ここでは私の失敗が主の失敗として扱われると理解したのだから。

「さて、ソイツ」

「ビットですわ。ビット・フライハイト・オルコット」

ちなみに主が私をビットと命名し、チェルシー殿がフライハイトと命名した。

「……。ビットには一年生寮の前に急遽用意したプレハブ小屋で暮らしてもらおう事になる。異論は認めん」

「はい。ビット、良いですわね？」

「……」

YESの意味合いを込めて、小さく唸りながら首を縦に振る。

オルコット家にいた頃からコレが私のYESだ。

NOの場合は小さく唸りながら首を横に振るわけだが、今回はなんの問題もないのでYESだ。

主と同じ部屋で暮らせると思っていたが、主は寮内部にいるわけだし、肉食動物である私を寮内に入れるワケには行かないと考えての事だろう。

ちなみに首輪とリードも強制される事になった。

これと言って問題はないが……。

あと、人間を襲った場合は射殺されるそうだ。

私とてまだ死にたくはないし、主の同属である存在を好き好んで

襲うつつもりはない。

さらに言うのなら、先ほど私の失敗が主の失敗に繋がる事を理解したので他の人間と関わるつもりはない。

何をされても基本無視を貫く。

そも、人間の腕力程度では私にダメージを与える事は難しい。

格闘技のプロなどであれば別だろうが、ここにいるのはあくまでも学生。

一部普通とは異なる匂いを持った人間も居たので学生だけが居るワケではなさそうだが、警戒領域を広めに取って置けば大丈夫だろう。

「それにしても驚きましたわ。ビットがISを使えるようになるなんて……。色が変わったりと不思議な事は立て続けに起きるものですわね」

「……………」

リードを引き、私をIS学園での住まいへと誘導しながら喋る主。私はそれに相槌を打つ為に唸り声をあげる。

私が何も言わなければ、回りからは主の独り言の様に見えるだろうが、隣を歩く存在感の塊と言っても良い私が相槌を打てば独り言にはならないだろ。

それにしても……。

主は先ほどから一人の人物の名を口の中で小さく呟いている。

私は人ではない。

この聴覚は人の何十倍も優れている。

だから聞えるのだ。

織斑・一夏と……。

おそらく、主を抱きかかえながら敵から逃げ回っていた男の事だろう。

主に好きな人物が出来たのであれば、それは良い事だ。

良い事なのだが、なにかこう……。
少しだけ発音が違うのだ。

チエルシー殿から聞いた事のある愛している人間を呼ぶ時の発音よりも、映画などで聞いた好敵手ライバルを見つけた時の主人公の発音に近い。

どうやら、主は恋人にかなり近い好敵手を見つける事が出来たようだ。

これが恋となるかは、織斑・一夏という人物に掛かっているのだろう。

私の寿命は人間に比べれば遙かに短い。

故、もしも織斑・一夏が主を不幸せにする存在となるならば、この命が尽き果てる前に喉笛を噛み千切らなければならぬ。

ん？ 主が立ち止まったという事は、ここが私が3年間お世話になる住処らしい。

「さ、ビット、付きましたわ。ここが三年間だけビットのお家になる場所ですわ。早朝は先生がお散歩に連れて行ってくれる事になっているから悪さをしてはダメですわよ？ あと、実技以外は放課後しか会いに来れないけれど、我慢するのですよ？ オルコット家の庭ではないのですから、探検も禁止ですわ。良いですわね？」

「……」

そも私に異論はないのでYESだ。

主の命令ならば逆らう理由もない。

プレハブ小屋の中は一定の温度に保たれているらしく心地よし、トイレもある。

餌は誰かが持って来てくれるのだろう。

ふかふかのベッドと誰が持ってきたのか大きなライオンとトラの人形もある。

文句の付けようがない。

まあ、かなり狭いが、そこは目を瞑るとしよう。

「ご飯は先生方が持つて来てくれますわ。朝は織斑先生、夜は榊原先生と別々の方ですね。脅かしたりしたらダメですわよ？」

「……」

これにもYESと応える。

さて、ちよつと無茶をしすぎた為か、3年間の飯の住処に着いたら眠くなってしまった。

主には悪いが、私はこの辺りで一眠りさせてもらおう。

。。。

数時間後。

住処に近づいてくる人の気配と肉の匂いで目が覚めた。

なぜか気配を消そうと頑張っている様に感じるが、人間が幾ら気配を消そうとも私からしてみれば全く消えてないワケで……。

しかも、私はライオンとアムールトラのハーフである。

雑種強勢という現象で生き物としての在り方はかなり優れたものとなつている事も関連しているかもしれない。

接近してくる人物、いまが夜なので榊原という人だろう。

榊原は住処の前、出入り口で停止し深呼吸をしている。

かなりの恐怖を感じているのか、呼吸が普通の人間よりも早く、深い。

そして、恐る恐ると言った感じでプレハブ小屋の扉を開けながら……。

「じ、ご飯だよー」

と、かなり弱々しい声を発した後、結構な量の肉を乗せた台車を押して入ってきた。

台車の車輪音からして肉の量は、15kgくらいだろう。

この量ならば、腹八分目というヤツだ。

一日30kgがいままでの私の平均食量だった事を考えると、一回の食量は主が指定したと考えるべきだろう。

まあ、いまは難しい事を考えるよりもご飯だ。

「……………」

「ひっ……………」

明らかに怯えている。

無理もないが、私としては少し傷つく。

こういう最初から怯えている人間には、ゆっくりと近づいてご飯を食べた後、またゆっくりと寝床に戻るに限る。

いままでのパターンから言って、数回繰り返せば危険がないと理解してくれるだろう。

まあ、主のご両親が残した遺産を狙う阿呆ならば、腕の一本でも食い干切ってやるが、ここはIS学園だからその必要はないだろう。

「……………」

ふむ、中々良い肉を運んできてくれる。

主は何処かオルコット家としてのプライドを優先する節がある。

だからこそ、高いけどあんまり美味しくない肉を買ってきてしまったりするのだ。

やはり、一番はチエルシー殿が買ってきてくれる新鮮な肉だろう。

「……」

つい先ほどまで生きていたのではないかと思われる程の新鮮度、アレに優る食事はない。

確か他の肉食種はその味を知ると人間を襲うらしいが、何とも悪かな事だ。

何を思っただけで最高の肉を持って来てくれる人間を襲うのか……。

まったく持つて理解できない。

人の近くにいる時点で我らは野生ではない。

野生ではないならば、野生ではないなりの生き方を学ばなければ捨てられるだけだ。

最悪殺されてしまうだろう。

まあ、私の場合には主に絶対なる忠誠を誓っているから例外なのかもしれないが。

「……」

ふう、喰った喰った。

お腹も良い感じに膨れた事だし寝るとしよう。

「……お、お邪魔しましたあー」

最後まで怯えっぱなしだったな。

まあ、慣れてもらえるまで我慢するしかないか……。

ととつ、寝る前にトイレ、トイレと……。

しっかし、コレは明らかにネコの砂を大量に敷き詰めて作った即席トイレだと思うのだが。

掃除担当の人物に期待するしかないな。

。

。
。

その夜。

轡木・十蔵は風邪を引いたわけでもないのに何回かクシャミをしたそうだ。

そして、翌日。

用務員を兼用している事を少しだけ後悔したらしい。

03・怒れる獣（後書き）

天才東さんなら仕方ない。

主人公の名前の由来

ゾイド新世紀/ZOIDSに登場するチーム・ブリッツ（主人公チーム）に所属するビット・クラウド（主人公）。

機獣新世紀ZOIDS（アニメ版ZOIDS）の主人公であるバン・フライハイト。

ビット・クラウド + バン・フライハイト || ビット・フライハイト

04・学園のペット

私の朝は早い。

時間にするならば早朝4時には目が覚める。

日の出少し前に起き、狭い住処をグルグルと徘徊する。

まあ、これで寝ぼけた頭が完全に目覚める訳だ。

そして、夜の間冷たくなった水を飲み、朝の餌と散歩係の織斑を待つ。

朝は餌の前に散歩だ。

コレだけは譲れない！

何せ、オルコット家での生活ではソレが当たり前であり、チエルシー殿との散歩は実に楽しい。

織斑との散歩が楽しいかどうかは分からないが、さすがにこの狭い住処から出て走り回れるスペースへと移動くらいはするだろう。

最低30分くらいは走り回りたいものだ。

「……オルコットはお前を犬として躡けたのか？」

いつの間にか現れた織斑の開口一番はコレだった。

確かに私は限り無く犬に近い形で躡けられると思われがちだが、主もチエルシー殿もこれと言って私に芸を仕込もうとはしなかった。ただ、私が周りで飼われていた犬の真似をして主に忠誠の意を表しているに過ぎない。

故にこの問には……。

「……」

NOだ。

「……本当に言葉を理解しているのか？ まあ良い。なんにしてもこの狭い場所ではストレス死しかねないからな、散歩の時間だ」

織斑は首を横に振った私を見て不思議そうな顔をする。

そして、恐怖を感じていないのか素早く首輪にリードを付けた。

長さはおそらく1.2mタイプだろう。

付かず離れずと言った距離か……。下手に走るとリードを握っている織斑を引き摺る事になりそうなので走れない。

とりあえず、誰もいないIS学園内を歩き回った。

大体15分。

その後、第二アリーナと書かれた場所へと入って行く。

「よし、ここなら思う存分走っていいぞ」

織斑が首輪からリードを外しながら言う。

なぜか表情が満足げなのが、ペットを飼いたい願望でも持っていたのだろうか？

なんにしても、走れるのならば思う存分走らせてもらおう。

「ただし、私が呼んだらすぐ戻ってくるんだ。逆らったら以降、ここで走る事は許可しないぞ？」

後ろから脅しみたいな織斑の言葉が聞える。

ま、呼ばれたら戻る程度ならば束縛にすらならない。

「????????」

軽く吠えて織斑に答え、私は広いアリーナを走り回った。

実に清々しい気分だ。

狭い所に押し込まれるのは性に合わない。

住処がオルコット家の庭くらい広ければ満足できるのだが、我俣は言えないだろう。

しかし、このアリーナはとてつもなく広いな。

私が全力で走り回れる程の広さがあるという事は、ISでもソコの速度を出して走り回ってもすぐに壁に衝突するという事はないのだろう。IS用に作られた場所ならではという感じだ。

グラウンドもかなりの広さが在る事は行きで確認できているし、次はあちらに行つて貰いたいものだ。

「ビット、戻れ！」

おっと、織斑が私をお呼びだ。

すぐに戻らなければ、散歩コースが一つ潰れてしまう。

「っ！？」

この速度で戻つたのならば何の文句も在るまい。

「……確かに「私が呼んだらすぐに戻れ」とは言ったが、ISを纏つてまで戻ってくる必要はない。しかし……。まさかPICに頼らずに走っているのか？ 見た所、浮遊もしていなければ止まる時も少し前から足でブレーキを掛けていたな……。アイツは一体何を考えてこんな物を作つてお前に与えたんだろうな？」

ふむ、戻る時は白き神の姿に成らなくとも良かったのか。

次回からは普通に戻ろう。

「戻つたら餌だ。行くぞ」

それにしても、織斑は首輪にリードを付けるのが上手いな。
どこかでブリーダーでもやっていたのだろうか？

少し熟れの様な物を感じる。

まあ、私としても付き合いやすいので何であれ良い事に変わりはないか。

「コレだけの量を食べるのか……」

住処に戻りながら、途中で私の餌が乗せてある台車を回収する織斑。

これで涎を垂らすとか言われたら、私は心の中で織斑のことを一生悪魔と呼称するだろう。

「さて、プレハブ小屋に着いたら食わせてやる。いいな？」

涎を垂らし、なんとか喰い付きたい衝動を抑えながらやっとの事で住処へともどる。

そして、私は織斑の「よし」を待った。

「……よし」

運動の後の食事は実に格別だ。

人間も似たような事を感じるのだろうか？

うまい、うまい。

「……とてつもなくでかいネコに犬の躰をしたらお前の様になるのだろうか」

む？ 織斑が何が言っているが、まあいまは飯だ。

人間はコレに色々と味をつけて食べているらしいが、私としては生が一番。

香辛料だったか？ なにやら沢山在るらしい。ま、どれもこれも私の口には合わなかったが。

そも、人間の味覚と私の味覚とでは種としての差がある。

それに、人間が美味しいと感じる物を、必ずしも私が美味しいと感じるワケではないのだ。

「本当に美味そうに食うやつだな」

美味しいのだから当たり前だ。

人間は肉を生で食うと腹を壊すとチエルシー殿から聞いた事がある。

なんとも勿体無い事だ。

「食い終わったか。今日の実技授業にはお前も参加して貰う。お披露目も兼ねてな」

ふう、喰った。喰った。

ん？ 私も人間の授業とやらに参加するのか……。

とすると、放課後以外で主に会う事ができるのだな。

「随分と嬉しそうな表情をするな。……ああ、飼い主にあえるからか」

「……」

YESだ。

それ以外に何が在ろう？

この私にとって世界で最も尊い存在である主と会える事は何よりも喜ばしい事だ。

その次は、第二の母であるチエルシー殿と会える事だな。

「時間になったら迎えに来る。いいな？」

「……」

コレだけの短い会話をし、織斑は寮の方へと戻っていった。

何時の間にやら水の交換とトイレ掃除が終わっているな……。

織斑と散歩に行っている間に人間の……この匂いから察するに年老いた男だろう。

トイレは綺麗だし、水も……水道水ではなくて天然物に変わっている。

いい仕事ぶりだ。

出会えたのならばお礼を言わなければならない。

さて、いまは織斑が迎えに来るまで一眠りするとしよう。

。

。

。

数時間後。

迎えに来た織斑に連れられてグラウンドに来ている。

水着の様な服を着た人間の女性が複数、その中に男性が一人。

確か、あの水着らしき服はISスーツという見た目からは想像出来ないほどの頑丈な物だ。

過去に主の命令でISスーツに噛み付いたことがあるが、噛み千切るのに随分と苦労した。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んで見せろ」

おお、主が飛ぶのか！

いつの日か私も主と共に飛びたいものだが、私は地上を走る獣である事にプライドを持っている。

こうして見ていられるだけでも十分な幸せだ。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒と掛からないぞ」

ん？ なんだ……。

あの男は戦士ウォーリアではなくて、新兵ニューキだったのか。

何か別の事を考えているな？ 最初に見た時は確かに戦士だったと思っただが、なんとも情けない。

「集中しろ」

なにやらテレビで見た変身ポーズの様な格好をするのが流行りなのか？ それとも、この男は変身ポーズみたいな事をやらなければISを纏ムスえないのだろうか？

まあ、新兵ニューキならば致し方ない。

人間にも本能というモノは在るだろうが、それは私たちの様に野生としての生き残る在り方とは少し違うのかもしれないな。

「よし、飛べ」

織斑の一言で男……いや、一夏と呼ぶべきだろうな。

織斑だと織斑と混ざるし、一夏で決定だ。

さて、主と一夏が空に舞い上がるが、主は少し一夏の様子見しているような感じで普段の上昇スピードではない。

一夏は遅い。

まっすぐ飛ぶ速度もあまりにも遅い。

主もそれに合わせているのだろう、普段の数%程の速度しか出してないな。

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」
「……………」

一夏は白式を使いこなせてはいないのか…………。
白式からは強い力を感じるので勿体無い事だ。

「ビット、いまからイツらに追いつけるか？」

織斑よ。突然話を振られても困るが…………。

「……………」

私はYESと答えよう。

なんの問題もなく追いついて見せよう。

「よし、では追い抜かして戻って来い。それで一夏も少しはヤル気を出すだろう。それにお前の主であるオルコットも一ター夏にあわせる必要性も無くなるかも知れんぞ」
「?????????!」

それならば駆け抜けよう。

咆哮と共に駆け出すのは実に気分が良い。

周りの人間が一瞬恐れ of 感情を露にするが、王者に道を譲っているかのようで今回は悪い気はしない。

しかし、思ったよりも早いな…………。

これでは…………。

ん？

《LIGER ZERO JAGER》

ライガーゼロイェーガー？

なんだそれは？ これは、白き神のもう一つの姿だとも言うのか？

……面白い。

主と同じ青ならば、さぞかし速い事だろう。

「?????????!」

『インストレーションシステムコールを確認！ TYPE JAGER！ TYPE JAGER！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！』

首輪から謎の音声が放たれた。

おそらく、篠ノ之・束が何かしらを仕込んだに違いない。

身体が一瞬だけ軽くなつたと感じたが、すぐに何かが体中に取り付けられた違和感を覚える。

『GO！ JAGER！』

首輪から知らぬ男の声が響くと、同時にとんでもない速度で自分が走り抜けている事に気がついた。

見たことのない世界。

いままで走った事のない速度の世界を感じる事ができる。

これはまた、素晴らしい。

「?????????!」

上空の二人を軽々と抜かし、グラウンド端でUターンをする。
ここで本気を出す事はできない。

本気で走ってはいけないと私の本能が告げている。
ならば、本気ではなく……主と一夏をほんの少し上回る程度の速度で十分だろう。

背中 of 《地上を駆け抜ける為の翼》を人がいないほうへと向け、
身体を無理やり倒しながら急旋回。

翼から力を抜いて、すべての足を使ってブレーキを掛ける。

織斑の真横、距離にして私の鼻先から30cm程のところだな。
完璧だ。

「……それが同時に発表されたCASチェンジング・アーマー・システムというワケか」

「……」

YESと言っておこう。

本来は違うが、そう思い込んでおいてもらった方が都合が良い。

「高速戦闘形態とでも言うべきか？　だが、速度を落とさずに向き
を変える事が出来る旋回性能は凄まじいものがあるな……。小回り
の利くイグニッション・ブーストと言ったところか。しかし、ソニ
ックブームが発生しかねん構造とは最悪だな」

「……」

最悪と言われても困る。

かなり速度を落として車程度に抑えたというのに……。

まあ、テレビで見たレーシングカーほどの速度を出していた可能
性は否定しないが。

「織斑、お前よりも後にISを手に入れたビットはすでにある程度
ISを使いこなしているぞ。喋っている暇が在るのならばお前も白

式をある程度は使えるようになれ。さて、織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地上から10cmだ」

先ほどのデモンストレーションで、一夏にどれほどの効果があるのやら……。

とりあえずいまは、織斑の横で伏せていよう。

ふむ、この授業中はイーガーのままで良いのだろうか？ まあ、解除の仕方が分からないというのが正確なところだが、解除の指示を出されていないのならば、このままで良いのだろう。

織斑が通信で主と一夏に話しかけてからすぐに降りてきたのは主だった。

さすがだ。

目標は地上から10cmと言われていたのに、主は9cmで止まっただけだ。

1cmの違いと言うのは大きいものだろう。

そのうちに主ならば、地上から1cmの所で完全停止をやってのけるに違いない。

「……………」

「お〜」

そしてだ。先ほどから私の尻尾を狙っている少女は何だ？ 私が怖くないのか？

というか、いまは授業中だ少女よ。

織斑に出席簿という硬い板で頭を叩かれても知らないぞ？

「……………」はあ、馬鹿者が」

ん？ 織斑の小さな呟きが頭の上から降ってきた。

ああ、なるほど……………」

一夏は急降下と完全停止と言われたのに、急降下しか実行していないワケか……。

しかし、あのまま突撃したら地面にクレーターが出来るな。

その際の衝撃波はどうなる？

ここは危険ではないのか？

『インストレーションシステムコールを確認！ TYPE SCHNEIDER！ TYPE SCHNEIDER！ TYPE SCHNEIDER！ 周囲の方は後方へ移動してください！ 周囲の方は後方へ移動してください！』

またも首輪から機械音声が放たれた。

『GO！ SCHNEIDER！』

次の瞬間には私の身体はオレンジ色に変化し、頭部には鬣のような角のような物が5本、背中に2本付いていた。

どうやらエネルギーシールドというのを前方に展開できるらしい。これならば、衝撃波を軽々と無効化できるだろう。

「
」

一夏が落下する前に立ち上がり、織斑の前に立つ。

この位置なら後ろの生徒全員をEシールド範囲内に収めることが出来るはずだ。

見事なクレーターを一夏が作ると同時、衝撃波と土煙がこちらに届く前にEシールドを展開する。

展開する際には、この5本の鬣のような物が前方に展開されるのか……。

目に見えるほどに強固なオレンジ色のEシールドが衝撃波を完全に殺し、土煙を分解して行く。

シールドとは名ばかり、攻撃用の手段の様だ。

「ほう……」

織斑の感心する様な眩きが聞える。

しかし、この状態は疲れるな……。

『稼動限界！ 稼動限界！ TYPE ZEROに強制換装を開始』

維持時間30秒程度。

機械音声が告げるように、気がつくとき白き神の姿と同じ状態に戻っていた。

イエーガーの方は使えているが、シュナイダーの方はまだまだ扱うのに無理が在るようだ。

ふむ、疲れた。

「ビット、大丈夫ですか？」

「……」

「……」

「……」

「……」

主との会話の中に、なにやらヒソヒソ話が聞えてくる。

守った事が吉と出たらしい。

その証拠に生徒らから恐怖の気配が薄れている事がわかる。

ま、織斑からは怒りの気配が漂い、一夏からは恐怖の気配が湧き出ていたりするが、私の知った所ではないな。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

ふむ、引っ叩かれないのは自身で開けた穴の中にいるからだろうな。

織斑も穴に下りるつもりはないようだし。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

ん？ この匂いは……。

篠ノ之・束？ いや、それにしても体液というか、汗の匂いが混ざっている。

アレからは汗の匂いなど一切しなかった。

ということは、篠ノ之・束の血縁者か……。

「大体だな一夏、お前というヤツは昔から」

「大丈夫ですか、一夏さん？ お怪我はなくて？」

主の声が一夏の近くから聞える。

一夏のあけた穴を滑り降り、一夏の元へと行ったのだろう。

主は優しいからな……。

しかし、主が側から離れた事に気がつかない程に疲れるとは、シユナイダーは中々難しい状態の様だ。

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

「……ISを装備していて怪我などするわけないだろう」

ふむ、なにやら不吉な雲行きだな。

主はプライドが高いから、ああ言っ言われ方をすると……。

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然の事。それがISを装備しててもですわ。常識でしてよ?」

ああ、予想通りだ。
耳を塞いで置こう。

「おゝ、可愛い〜」
「……………」

先ほどから私に一切の恐怖を抱かないこの少女は本当に何者なんだ?

というか、この状態では自慢の毛並みは鋼鉄の毛並みとなるからふわふわではないだろうに…………。

ついでに尻尾を掴もうとするな。

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやってろ。それと、そこ。いつまでもビットの尻尾で遊んでないで列に戻れ」

本当に渋々と言った感じで私の尻尾から離れて行く少女。
はあ…………。授業以外で出会うことが在ったら遊んでやるとしよう。
さて、織斑が主と篠ノ之を押し退け、一夏の前に立っている。
一夏が這い上がってきたクレーターは放置されているが、あとで一夏が埋める事になるのだろうか。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在に出来るようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「はっ、はい!…」

「よし、では始める」

ふむ、随分と集中しているようだが、一々ポーズを取らなければいけないのか。

だが、面白いな。

ああやって虚空から剣が出現するのか……。

ならば、私の体もああやって変わっているのだろうか？　いつかチャンスが在ったら見てみたいものだ。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

やはり織斑は教師というよりもブリーダーだな。教えるのではなくて躡けるといふ感じがする。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

主の出番らしいな。

昔、主も一夏の様にポーズを取らなければ武器を呼び出せなかったが、いまはどの様な状態でも武器を呼び出すことが出来る。

努力の賜物だろう。

だが、主はその努力を回りに知られる事を嫌う。

知っているのは、私とチエルシー殿くらいな物だろう。

「さすがだな、代表候補生」

「当然の事ですわ」

ああ、主の悪い癖が出てしまった。

褒められると調子に乗ってしまうのが主の悪い癖だ。

オルコット家にいた頃は、チエルシー殿がある程度主の手綱を握っているような感覚が在ったのもこの癖が在る故だろう。

遺産狙いの馬鹿どもが、この癖を付いて暗躍しようとしていた所を何度私が潰した事が……。

ま、腑抜けなんぞ一吼えで逃げ出すから苦労は無かったが……。

「セシリア、接近用の武装を展開しろ」

「……はっ、はい」

そうなるだろう。

主は最初の銃を出したのだから、次は剣だ。

さて、ここで問題だが……主は接近用の武装を呼び出すのが大変苦手なのだ。

なぜ苦手なのかというと、主のISブルー・ティアーズは基本的に中距離射撃型のISである。

接近武装はインターセプターと呼ばれる短剣一つ。

だからこそ、インターセプターを呼び出す機会が少なく、本国に居た頃の訓練でも殆ど呼び出していなかったと記憶している。

「……くっ」

「まだか？」

「……。はあ、インターセプター」

主は何処か諦めるように短剣の名を呟きながら展開する。

プライドの高い主の事だ。

武器の名を呼びながら展開という初心者の事柄は、屈辱以外の何物でもないだろう。

「……何秒かかっている？ お前は、実戦でも相手に待ってもらおうのか？」

「実戦では接近の間合いに入らせませんわ！ ですから、問題

」

「初心者である織斑との対戦で、簡単に懐を許していたように見えただが？」

「あ、あれは……。くっ……」

悔しそうに握り拳を作る主。

織斑は少し主をいじめ過ぎだと思いが、これも授業の一環なのだろう。

オルコット家ならば、一吼えでもしている所だが……。頑張れ、主！

「時間だな」

織斑がそういうと、チャイムというモノが鳴り響く。

時計も見えていないのに時間を正確に把握するとは、織斑は人間よりも私たちよりなのかも知れないな。

「今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

主は私を一撫でして引き上げてしまったし、私も一夏を手伝う義理がないので引き上げるとしよう。

といっても、私のリードは織斑が持っているので織斑に連れられてという形になるが……。

「今日のご苦労だった。ゆっくり休め」

「……」

そうさせてもらおう。

04 学園のペット（後書き）

セシリアの技能を少し向上させました。

ですが、代わりに接近武器の呼び出しに癖を付ける事にしました。

ヒロインが織斑千冬になり始めている気がする。

けど、大丈夫です。

【言語?】

ビット・フライハイト・オルコットは、人間の言葉を理解しているライガーです。
人語こそ喋れませんが、何とか意思疎通を計ろうと様々な鳴き方をします。

【一例】

「……」
「……」
YES (肯定)、ありがとう

「……」
「……」
NO (否定)、ごめんなさい

「……」
挨拶 (おはよう、こんにちは、こんばんわ、おやすみなら)

「」
「」
警戒、注意

「」
「!」
威嚇、拒絶

「?????????!」
攻撃、敵

【TYPE CHANGE タイプチェンジ】

CASを作動させる事により行われる装甲換装の事。

現在解放されているTYPEは、基礎のZEROとJAGER、SCHNEIDERの3種類となっている。

CASを作動（実際はビットが思うだけで良い）させると、全身の金属細胞が活性化され、記憶されている特定の形状へと瞬時に変化する。

変化時間は大よそ0.2秒であり、金属細胞が完全に活性化するまで10秒ほど掛かる事から10.2秒の時間を有する。

篠ノ之・束が開発した首輪は、この金属細胞活性化の兆しを読み取り、指定された手順に従い喋りだす高性能AI。

首輪の正式名称は、ジャツジマン。

篠ノ之・束作でありながら、良心的なAIであり、少しズレた常識人の様な人格プログラムを有している。

TYPE CHANGEの際に発生する人的被害を考慮して周りに警告を行ったり、ビットの成そうとしている事を遠まわしに回りに伝えたりもする。

例『インストールションシステムコールを確認！ TYPE JAGER！ TYPE JAGER！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！』

また、一定領域内に特殊な音を響かせ、フィールド内部の事柄を全て把握する事が出来る機能を有しているらしい。

【INSTALLATION SYSTEM CALL】

インストールションシステムコール

CASの作動が確認された際にジャツジマンが言うシステム名。

直訳で導入体型の呼び出しとなる。

CASが作動してもジャツジマンがISCを確認しなければ、ジャツジマンによって金属細胞変化は妨害されて失敗に終わる。

ビットに痛みを与え、意識を別に逸らす事で金属細胞の変化を停止させ、金属細胞の元に戻ろうという特性を利用し、TYPE CH ANGEを不可能とするが、ビットの意識が痛みでは逸らされなかつたり、怒りに支配されている状態では効果が薄い。

その際、ジャツジマンは『警告！ 警告！ TYPE WILD発動を確認！ 周囲の方は今すぐ避難してください！ 周囲の方は今すぐ避難してください！』という台詞を喋る。

ブルー・ティアーズの画面には『CELEDRATE INNER WILDNESS（内なる野生を褒め讃える）』と表示される。

00/3・タイプゼロ（後書き）

ライガーゼロパンツァーが一番好きですが、あれは色々と問題がある装備なので登場は銀の福音戦を予定していますが……。

現在の私の予定のまま進むと、臨海学校時はビットはIS学園で留守番です。

最悪、ブルー・ティアーズvsサイレント・ゼフィルスの2回戦目になるのではないかと思われます。

しかし、パンツァーの火力はそのデメリットから色々つぶっ飛んでいる設定を公式が与えている為、どれくらいに抑えるか悩みどころです。

05・以外に暇だった

榊原は相変わらず怯えたまま夜の食事を持って来て、私が食べ終わると同時に引き上げて行った。

さすがに2日目ではなれもしないか……。

「……………」

特にやる事もないのに眠るとしよう。

嗅いだ事のない匂いがIS学園内に入ってきたが、まあ新しい人間でも着たのだろう。

敵意も感じないし……。

あとはあれだ。

一夏を祝うパーティをやるとかなんとか言っていたのを耳にしたからな。

騒がしくなる前に寝てしまつに限る。

「……………」

では、おやすみなさい。

。。。

翌日。

やはり一日目通りに事が進む。

1週間もすればコレが私の日課となるのだろう。

今日は私が出られる実技もないらしい。
外にも出れない現状、寝る以外の選択肢が在ろうか？ いや、ない。

(反語オツ！)

ん？ なんだか金髪のいけ好かないオヤジが見えた様な気がするが、気のせいに違いない。
なにせここは、私以外ほとんど誰も立ち入らないプレハブ小屋なのだからな。

「……………」

昼食の時も主はこちらに訪れる事はできないし、やはり寝る。

。。。

翌日。

昨日来た榊原は、少しだけ私に触れて言ったな。
慣れ始めているという事だろう。

織斑は初日から私に慣れている雰囲気があったのにな…………。
そういえば、まだトイレ掃除と水を替える人には出会っていないな。

そして結局、私はまた寝て過ごす…………。

。。。

翌日。

さて、今日も今日とて何も変わらない。

実技が増えてきたのかマスターと会える機会も増えたが、さすがに授業中という事もあって撫でては貰えない。

しかも、クラス対抗戦というモノが行われるらしく、主は一夏に戦い方を教えたりするので忙しいとの事だ。

。

。

。

数週間後。

気がついたら5月になってしまった。

あれから主は毎日、毎日一夏と訓練を行っているらしい。

箒も一緒との事だ。

篠ノ之だと、束と混ざるからな。

箒と呼称する事にした。

まあ、ソレは良いとして……やる事がない。

生徒の方は私を恐れなくなったし、榊原も私に怯える事は無くなつたが、如何せん人と接触できる時間が少なすぎる。

別の意味でストレスが溜まって行くな……。

「……………」

暇だあー。

うん？ なんだ？ この微妙な匂いは……………？

榊原の匂いに何か混じっている？ 酒か……？

「……うっ、うっ……ぐすっ……」

な、なんだ？

「なんで毎回、まいがい……。へんな。おどこにひっがかつぢやうがなあ……。うっ、ぐすっ、ぐすっ……。わだじもげっこんしいよ。お」

いや、私に言われてな？ 人間年齢だと27歳くらいだが、実際は2歳だぞ？

酒を飲みすぎだろう。

というか、教師が学園で酒を飲んじゃダメじゃないのか？ 夜中で生徒が見てないからと言ってもだな。

「うっ……ぎいでよ。お」

「……」

どうすれば良いんだ？ いや、私は何を求められているんだ？

さすがに私でも体を揺さぶられ続けたら寝れないし……。

とはいえ、下手に離れると薄着しか着ていない榊原では、風邪を引いてしまう可能性があるし、困ったな。

比較的暖かいとはいえ、外に出す訳にも行かないし……この住処から無許可で出ることには出来ないから背中に乗せて行く事もできない。

手詰まりだな。

まあしかたない、一夜くらいならば付き合っか。

。

。

2時間後。

榊原は酔っ払ったまま、おぼつかない足取りで自分の部屋へと帰っていった。

まあ、突然。

「帰る。まだぐるね〜」

「……………」

と言って帰って行ってしまったワケだ。

朝までいられても困るし、助かったが、あんな状態で無事に自室へと辿り着けるのか？

「……………」

と、まあ心配していたワケだが、朝も実技の時間も普段通り、夜には何事もなかったかの様に榊原は餌を持って来た。

そして、私の毛並みを堪能してから戻って行く。

榊原に抱きつかれるという普段とは異なるイベントが在ったけれど、概ね普段通りだ。

さて、また一眠りするか……………。

。

。

……………うん？ この匂いは、まさか……………。

「……うっ、うっ……ぐすっ……」
「……」

昨日の今日でか!?

いや、主やチエルシー殿に劣るとはいえ、榊原も十分に人から見て美人だと思うが……。

人の世とは間々成らぬ物なのだな。

「なんで毎回、まいがい……。へんなおどこにひっがかつぢやうがなあ……。うう、ぐすっ、ぐすっ……。わだじもげっごんしだ
いよ、お」
「……」

ああ、昨日と同じ台詞だな。

とうとうとは……。

「うう……ぎいでよ、お」
「……」

ああ、うん。

聞いてやる。聞いてやる。

「あ、りがどうー」

それから数時間、私にはどうしようもない事を榊原は吐き出した。榊原の性癖に若干難がある様な気がするが、正直これは本人の問題だ。

私たちならば、榊原ほどの女性がいたら強制的にモノにしてしま
う雄も出てくる可能性はあるが、それはあくまでも私たち獣の世界

での話。

人間である榊原には当てはまらない。

チエルシー殿が言っていた男運がないという言葉の前に、男に対してスリルを求めすぎている傾向が在る様に見て取れる。

そしてだ。

「もう、ビッドのおよめさんになっちゃおうかなあ……。う
う……」

「……」

種が違うから無理だろう。

そして、自棄酒で結婚を私に迫るな……。

はあ、とりあえず私には、榊原が良い男性と巡り合えるように祈ることしか出来ない。

あとは無抵抗なまま、こつやって抱き付かれてやるしか……。

あ！ 涎を垂らすな！

耳に噛み付くな！

ちよつとまで、変な所に手を伸ばすな！

「……！」

。

。

。

翌日。

……。

……。

「さあ、ビット。日課の散歩の時間……のわあっ!？」
「……」

織斑！ 織斑！

ああ、やっと来てくれたか！ 助けてくれ！

「な、なんだ。おい！ つう……。なんだこの酒の臭さは！」
「……」

うう……。

榊原が、榊原が……。

「……。榊原先生？ ビット、まさかお前……」
「……」

違う！

アレは酔っ払って寝てるだけだ！

現にアホみたいにデカイいびきをかいてるだろう！

酔っ払って一夜中ブツブツと何か呟くわ。

本気で迫ってくるわ……。

榊原怖い、榊原怖い、榊原怖い……。

「……。ビット、お前がそこまで怯えるとは、榊原先生は一体何を
したんだ？」
「……………」

言えるわけがないだろう。

R - 18でもなければ、R - 15でもないのだから！

「ま、まあ、なんにしてもだ。榊原先生！ 一体こんな所で何をし

ている！ その薄着は何だ！」

「…………ふあ？ あ…………。こ、これは、織斑先生、おはようございませす。…………えっと、朝から私の部屋に何の御用で？」

「私の部屋ではない。ここは、ビットに用意されたプレハブ小屋の中です。一体何をやってるんですか！」

「え？」

ああ、そんな本気で不思議そうな表情をしながらキョロキョロとあたりを見渡さないで欲しい。

というか、覚えていないのか？

「あ…………れえ？」

「榊原先生が一体何をやっていたかは知りませんが、とにかく！早くご自身の部屋に戻ってシャワーを浴びてください」

「…………。は、はい！」

織斑に怒られ、榊原はようやく正気に戻ってくれたらしい。

顔を紅く染めて全力で私の住処を後にした。

「はあ…………。榊原先生に関しては色々と噂がな…………。彼女も苦労しているんだ。女としてな」

「……………」

いや、溜息を付きながら私に言われてもだな？

ものすごく困るわけだ。

「私も分からなくはないが…………。とりあえずだ。ビット、榊原先生を嫌ってやらないでくれ」

「……………」

……。
以前から男運がないのだと自棄酒で煽りながら来ていたからな。
ここで私も榊原から離れてしまったら、さらに自棄酒の回数が増え、健康に悪い。
しかし……。

「ん？ どうした？」
「……」

何か間違いを起こつたらごめんなさい。
ホントごめんなさい。
チエルシー殿になんて説明すれば良いか考えておくべきなのだろうか？

「……なんだか良くわからんが、お前が少し追い込まれているという事だけはわかってやれる。また酔っ払った榊原先生が着たら吼えるだ。いいな？」
「……」

織斑……。
ありがとう。

さすがにこんな内容を主に知られるのは、雄としての恥となりかねないからな。

はあ、ストレスで毛が抜けたりしなければ良いが……。

「さて、散歩に行くぞ」
「……」

。
。

。。
クラス対抗戦試合当日。

まあ、例の如くに日課をこなし、住処で惰眠を貪っているフリをしている。

あまりにもやる事がない。

かと言って眠気が在るわけでもない。

玩具にちよつと大きめなトラック用タイヤをもらったのだが、あんまり噛み付いているとすぐにボロボロになつてしまつからな。

さて、どうしようか……。

「……………」

うん？

なんだこの震動は？ それに、コレは悲鳴？

むう、無理に出るのは良くないし、だからと言ってこの悲鳴を無視するわけにも行かない。

主の声は聞えないが……。

それになんだ？ 悲鳴がゆっくりと小さくなって行く？

何かに遮断されて聞え難くなっている感じがするな。

「……………」

とりあえず、窓から外を……。

おお？ ISを纏った教師の方々が第二アリーナに向かって行くな。

やはり、ただ事ではないか……。

もし、主の身に危険が迫っているのだとしたら、今回の件は致し方ないと見てももらえるだろうか？

扉を壊してしまうのは不本意だが仕方ない。

「……………」

ふむ、前足パンチでアツサリ壊れる扉は問題だな。

鍵をかけている意味がない。

さてと、ISを纏っている教師の後を付いていくとするか。

「あら？　なんでビット君が表に出てるの？」

「本当だ。轡木さんが扉に鍵でも掛け忘れたのかしら？」

「私たちについてくるみたいだけど、どうする？」

「戻してる暇もないし、このまま行きましょう」

「……………」

付いていった先に在ったのは、閉ざされ扉でしたと……………。
なるほど、コレが開かないわけか。

「まだ遮断シールドを解除できてないのね」

「中で生徒が未確認と戦ってるのに……………」

「歯痒いわね」

「……………」

コレを壊すので在ればどうすべきか……………。

おそらく、白き神の姿ではこの扉を破る事はできない。

イエーガーは速度以外では期待できない。

ならば、酷く疲れるがシュナイダーしかないだろう。

「ダイレクトインストレーションシステムコールを確認！　TYP

E SCHNEIDER！　TYPE SCHNEIDER！　周

囲の方は後方へ移動してください！　周囲の方は後方へ移動してく

ださい!』

この首輪から発せられる機械音声は決まりの様な物らしいな。凄くうるさいから消したいのだが……。

「え? なになに?」

「ビット君が喋ったの?」

「……ビット君の首輪から聞えたわね」

『GO! SCHNEIDER!』

決め台詞の様な言葉と共に、私の身体はオレンジ色に変化し、シユナイダーへと換わる。

さて……。

とりあえず、ISを纏った教師らの前に出て扉を正面に後ろ足を踏ん張ると……。

イメージは撃ち貫く感じだろうか?

中々難しいな……。

鬣を全て前に展開して、両サイドの刃も前方に展開。

身体の奥底からエネルギーを前方にかき集める感じで……。

顔の前に強固な壁を張り巡らすイメージ……。

「……な、なんか凄い事になってないかしら?」

「え、えつと、ビット君もしかして遮断シールドを壊すつもり?」

「でも、この遮断シールドはISの物を流用してるから絶対防御クラスの……」

「?????????!」

「ひっ!?!」

刺し貫き! 引き裂くまで!

「?????????!」

『必殺！ セブンブレードアタック！』

私の咆哮に被せる様に喋るんじゃない首輪あつ!!!

05・以外に暇だった（後書き）

やっと、小説版？に該当する部分が終わろうとしています。

6はまた日常の話みたいになりますが、お休みの会話が在るのでピットとセシリアを絡ませる事が出来ますね。

うれしいです。

そういえば、先ほどアクセス解析を見たらユニークが707人と表示されていて驚きました。

あげ始めた当初は58人とかだったので……。

感想、改善点、ご要望などが在りましたら何か一言残してもらえるとうれしいです。

06・青の在り方

必殺の一撃。

それは、当てることが出来れば確かに相手を倒す事ができるだろう。

だが、当らなければ無駄にエネルギーを消費するだけのデメリットだけしかない一撃となる。

「くっ……!!」

故に一夏は焦っていた。

未確認との戦いに置いて、これまで四度のチャンスが在った。

それは、千冬ならば100%零落白夜を当てることの出来る間合

い。だが、一夏は一度たりとも当てることは出来なかった。

「一夏っ、馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ」

「ねらってるっつーの!!」

一夏には経験が足らなかった。

故、相手のスペックを凌駕する攻撃をする事は出来なかった。白式のスペックは、未確認を上回ってはいる。

一夏が反応できないが故に当たらないのだ。

「一夏っ、離脱!!」

「お、おっっ!!」

一夏と鈴は、未確認に翻弄され続けた。
デタラメに行われる攻撃。

的確に二人を狙って来るビーム。
人の考えからすれば、滅茶苦茶なのだろう。

現に鈴は自らの見えない攻撃を七度叩き落され、こうつぶやいた。

「ああもうつ、めんどくさいわねコイツ！」

こうして二人が未確認に決定打を与える事が出来ず、ただ回避を
続けていた時……。

閉ざされていた扉の一つが大きな音を立てながら崩壊した。

その大穴をあけたのは、オレンジ色の獣だった。

獣は弱々しい足取りで何とかアリーナ内部に入る。

そして、そこで力尽きた様に伏せた。

獣の後ろからは、4人の教師からなる教師部隊が獣……ビットの
後続く様に入ってくる。

「織斑君と凰さんは非難してください」

「ここからは、私たち教師の仕事です」

教師の二人がそう良いながら一夏と鈴の前に移動する。

そして、他の二人は素早く未確認を挟む様に移動した。

「直ちにI Sを解除して投降しなさい」

「抵抗するならば、容赦はしません」

未確認は少しの停止し、動き出した瞬間には二人の教師に向かっ
てビームを放っていた。

シユナイダーはやはり疲れる。

『稼働限界！ 稼働限界！ TYPE ZEROに強制換装を開始』

もう寝てしまいたい。

だが、目の前に敵対する存在がいる以上、眠る事は即ち死を意味する。

それにあの未確認は主を狙った存在と良く似ている。

「……………」

アレに人間が乗っていないとどうやって伝えようか……………。

人間は私たちほど鼻が利かないから気がつかないのだろう。

さて、どうしたものか？

教師たちはラファール・リヴァイヴというISで未確認と応戦している。

一夏と……………見た事がない女子も一緒に応戦しているな。

6対1でも戦況は五分。

おそらく最初のゴーレムの経験値が反映されているのだろう。

主が言っていたな。

ISのコアは学習すると……………。

ならば、アレが同型ならば私の恐怖を学んでいる可能性がある。

だが……………。

「……………」

私の声でソレを人間に伝える事は出来ない。

一夏の側に居る少女……教師たちに凰と呼ばれていたな。
彼女が言うには。

「でも無人機なんてありえない。ISは人が乗らないと絶対に動かない」

と言っているのが聞えた。

疲れているのと交戦音がうるさくて今一声が拾えないが、これで見ているはずだ。

そして、一夏は一度無人機を見ている。

私に噛み砕かれた憐れな機械人形を……。

「いや、一度だけ見たことがあるんだ。アレはISと呼べるものじゃない。やなかつたかもしれないけどな。それに、もしも人が乗っていないのなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

一夏にソレができるだろうか？

いや、出来てもらわなければ困る。

「……織斑君のワンオフアビリティならアレを倒せそうですか？」

「私たちが幾ら攻撃しても、おそらく勝負は付かないでしょう。エネルギーもあちらの方が圧倒的な様ですしね」

「未確認はこちらで抑えます」

「一夏君は攻撃に専念してください。凰さんは一夏君のサポートを」
教師部隊が未確認を抑えるのならば大丈夫だろう。

経験豊富な教師部隊があの手確認に勝てない理由は一つ、決定打がない事だ。

決定打と成り得る一夏の一撃を当てさせることが出来れば、勝てるだろう。

余程の事がない限りは……。

「一夏あつー！」

うるさい。

なんだ？ どこからだ？

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとするー！」

箒か……。

狩りの最中に一体何を考えている？

誘導すると言った意味合いもない。

ただ衝動的に叫んだだけ……そして、自らの身を危険に晒し、群れの、しかも自らが思いを寄せる男を危険に晒すか。

本当に人間とは理解し難い一面を持つものだ。

さて、あの生命とは異なる者の興味が箒に移ってしまった以上、箒の命も危ないだろう。

「篠ノ之さん、何をしてるんですか！ 早くそこから逃げて！」

箒が逃げても二人ほど気絶している。

彼女らを見殺しにしたと在っては、私のプライドが廃る。

チエルシー殿が言っていたが、父の種族は雄は狩りをしないらしい。

しかし、群れを守る時は命がけで戦うという。

母の種族は雄も雌も狩りをし、戦ったと聞いた。

ならば、両方の血を引き継ぐ私は助けなければならぬだろう。それに主は昔こんな言葉を呟いた事がある。

「noblesse oblige（貴族が義務を負う）」

オルコット家はイギリスの名門貴族だ。
私もペットという立場では在るが、その名を主から頂いている。
ならば……。

『インストレーションシステムコールを確認！ TYPE JAGER！ TYPE JAGER！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！ 周囲のISを装備していない方は避難してください！』

いまの私は誰よりも速い。

地上最速の獣、チーターなんぞ赤子も同然の速さを有している。
なぜならば、私は誇り高き王の子……。

否、王なのだから！

「?????????!」

『GO！ JAGER！』

ああ、それにしても……。

久しく主に頭を撫でて貰っていないな。

。
。
。

誇り高き獣は吼えた。

そして、風の刃を纏い愚かな少女の前に踊り出た。
自らの体を盾にするその行動は、確かに愚かな少女を救いはした。
だが、敵の放ったビームは無慈悲に獣の撃ち落す。

「っ！！ オオオツ！」

だが、その時に発生した隙を突き、白は敵の右腕を斬り落とした。

「まだまだあつ！」

そして、赤が残った左腕を斬り落とす。

敵はそれでも獣を殺そうとした。

動けなくなり、ただ横たわっているだけの獣を……。

「……ゆるしませんわ」

敵に応えたのは獣ではなく、怒りに満ちた獣の主だった。

怒りは一時的に青の力を引き上げ、在るべき形を体現する。

四方八方からレーザーで撃ち貫かれた敵は、原型を留める事無く破壊された。

怒りとは、時にとつともない力を人間に与える。

だがソレは決まって残酷であり、無慈悲なものだ。

そして、本当に一時的なものに過ぎない。

我に返れば失われる力だ。

だからこそ、獣の主は知ってしまった。

自らが誇り高い獣の主に相応しくないと……。

そして、考えた。

相応しくなるにはどうすべきか？ IS学園に来てからの自分の行動を見つめ直した。

白を侮り、貴族らしからぬ言葉を吐き出した自分を……。

自らの力を過信し、無様な敗北を帰した自分を……。

そして、白に見て欲しいが為に周りを見ていなかった。蔑ろにしてしまった自分を恥じた。

青はこの時、この瞬間から変わり始める。

本物の貴族である為に、誇り高い獣の主に相応しい自分である為に……。

。。。

全身が酷く重い。

それに、身体の節々が悲鳴をあげている。

もしもコレが自然界ならば、私は当に食われている事だろう。

朝の匂いがする事から、既に1日ほど経過している事がわかる。

それと、この懐かしい重さは……。

「……すう〜」

「……………」

まるで故郷に、オルコット家に帰って来たかの様な光景だ。

私を抱き締めるような形で寝る主。

これで目の前に椅子が在ってチエルシー殿が微笑んでいれば完璧なのだが、目の前に在るのは断熱材の貼られたプレハブ小屋の壁。

ああ、やはり……。

いつ見てもやっつけ仕事間が溢れ出ているな。

おや？

「起きていたか」

「……………」

織斑か……。

気配が一部消えていたから、織斑だろうとは思ってはいたが。

やはり、織斑は私たち側に非常に近い人間なのだと言認識させら

れる。

同種であつたのならば、嫁に欲しいくらいだ。

「アレだけの攻撃を受けても全身に軽度の打撲で済むとは、お前も大概化物だな」

「……………」

東曰く、この身は白き神と一体化しているらしいからな。

それならば、あの程度の攻撃など恐れる事はない。

……………が、私がまだまだ未熟であり、恐怖を感じたからこそ受けた傷だろう。

「……………オルコットは、一日中お前の看病をしていた。自らの主に感謝する事だな」

「……………」

そうか……………。

学業で忙しい主に無茶をさせてしまった。

三度戦闘が起こった際は、守るだけではなく、自らも傷つかない配慮をしなければ行けないな。

「織斑、凰、篠ノ之がお前を心配していた。そして、感謝もしていた。後日の実技ではイヤという程撫でられるかもしれないが、多めに見てやれ」

「……………」

撫でられるのは嫌いではない。

だからこそ、ソレに関しての問題はないが……………。

関節が悲鳴をあげている以上、私は動ける段階にはない。

「ふつ、本当に利口だなビットは……。私もお前みたいなのが一匹欲しいよ」

「……………」

さて、私の様な存在が他にいるだろうか？

白き神の記憶を垣間見た時、様々な獣の形をした神々がいた事は確認しているが……………。

果たしてこの世界に、私同様の存在がいるのだろうか？
わからないな。

「ではな」

「……………」

織斑はそれだけ言って去ってしまった。

主は……………。

「ビット、ごめんなさい」

「……………」

「わたくしは、ダメな飼い主ですわね」

「……………」

NOだ。

主は私を生かしてくれた。

主と出会わなければ私は、他の兄弟同様に死んでいたことだろう。

「……………。ビット……………。わたくし、がんばりますわ。貴方に相応しい

飼い主である為に！」

「……………」

主の瞳からは決意が見て取れる。

ならば、私から言う事は何も無い。

私は自らの事を王と称した。

だが、私の王は主ただ一人なのだから……。

なればこそ、私は主に付き従う。

人間に比べれば遥かに短いこの命が続く限り……。

。

。

。

IS学園地下。

それは、人に隠されたもう一つの学園の素顔。

素人目には何の設備だか全く分からない様々な機械が並んでいる。

それらの中央、手術台の様な物の上に両手脚が砕かれ、胴体も撃ち抜かれた未確認が横たわっていた。

その状態は、まるで穴あきチーズの様でもある。

「ISの解析結果が出ました」

「ああ、どうだった」

「ビット君がやってきた時に現れた無人機と同型です。推測ですが、前回現れた未完成の無人機を人型として完成させたのが今回の無人機ではないかと」

「そうか」

ISは篠ノ之・束の手を離れ、様々な国で開発が行われている。

だが、遠隔操作と独自稼動という技術は完成させてはいないのだ。いや、もっと正確に言うのなら、その技術に対しての足がかりすら得られていない状況だ。

「どのような方法で動いていたかは不明です。内部に機密保持の為

の自壊プログラムの様な物が仕込まれていたらしく……」

「そうか……。コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

先ほどISは篠ノ之・束の手を離れたと説明したが、例外が一つだけある。

それは、ISコア。

中核部分は篠ノ之・束の手を離れてはいない。

そして、ISコアとは篠ノ之・束ただ一人が作れる物であり、他は誰も作成する事は不可能な文字通りのブラックボックス。

本来ならば、世界に467個しか存在しないはずの代物である。だが、ここで一つ疑問が発生する。

467機しか造れない欠陥兵器がなぜ世界の中心となっているのか？

一つ、篠ノ之・束があらゆるプロテクトを突破し、様々な機構を押し潰すことが可能な天災であるが故。

そして、もう一つ。

核の様に人類全てを、地球そのものを壊す事がない兵器である事があげられるだろう。

核戦争が始まれば、その先に在るのはすべての生命の死滅だ。

だが、ISでならば？

被害はISを纏った少女だけに限られる。

やたら兵士を散らす必要もない。

死ぬのは一人。

なんともエコな兵器だ。

「もう少しだけ解析を続けてくれ」

「わかりました」

壊れた二機の無人機。

それは、ISで行われる戦争を現実の物にしかねない代物だった。ISを纏った少女が死ねば、少女を死なせた国は対戦相手以外の第三国から非難されるだろう。

だが、無人機ならば？

その限りには含まれない。

攻撃範囲を決めてやれば、そこに敵国の民間人がいようが関係はない。

予めこの範囲を攻撃するだけでも宣言してやっておけば、世界から非難される事は少ないだろう。

「……………」

だが、この無人機が作られた理由、思惑を理解できる者はこの世界には誰一人としていないだろう。

狂人篠ノ之・束は誰にも理解されたりはしない。

誰かに理解を求める事のない生き物なのだから……………。

? END

06・青の在り方（後書き）

次回からは小説版？に該当します。

今回は最後の方が意味不明でしたが、なんで欠陥兵器であるISが世界の中心なのかな？と自分なりに考えて書いてみました。

セシリアはちよろくないと、私は信じてる。

感想、改善点、ご要望などが在りましたら何か一言残してもらえるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9985z/>

IS（インフィニット・ストラトス） / 青を守るゼロ

2012年1月4日10時49分発行